

## 21) 『鳥獣人物戯画』と『病草紙』

Tyozyuugiga and Yamainosōsi

医の博物館 西巻明彦  
日本歯科大学 屋代正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*  
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

演者らは、文化と歯の表象の関係についての探究をすすめている。『病草紙』は、平安時代、口臭、重舌、歯周病など歯科疾患が描写されている数少ない絵巻物である。『病草紙』とは後世名付けられた別称であり、どのような正式名称であったのかすら不明であり、その制作意図も後代になってみれば、はっきりしたことはわからない。そのため数多くの推論が生まれる背景となっている。病という現象は、本来忌みの行為であり、平安時代は医療よりも呪術が優先される時代であった。今日、一連の絵巻物群は、後白河法皇が制作を命じ、その内容を手づから指示をなし、蓮華王院の宝蔵庫に収納される王権の宝物であったという説が、なかば定説化している。当然王権の宝物であるならば、当時の医師達が内容を見る機会はきわめて少ないと言える。となれば、『病草紙』は医師に見せる絵巻物でない以上、治療についての記載は必要のないことになる。『病草紙』に描かれている病は、特異な疾患もあるが、日常ありふれた疾患も多い。六道絵と『病草紙』を見るむきもあるが、仏罰を受けるほどの疾患ではない病もみられる。いずれにしても、貴族社会から武家社会へ移行する院政期の文化として『病草紙』をとらえるならば、後白河法皇の制作したといわれる一連の絵巻物群と比較対称することは、その制作意図をとらえる上で、必要なことである。今回、『鳥獣人物戯画』について『病草紙』との比較を行った。

『鳥獣人物戯画』は、高山寺に伝えられている甲、乙、丙、丁巻が有名であるが、その断簡が各地に伝承されている。鳥羽僧正の作と言われているが、実際には各巻で筆法が異なっているので、数人の絵師がかかわっていることは明らかである。もっとも古い『鳥獣人物戯画』の高山寺の記録は、永正十六年(1519)6月5日付で『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』に「シャレ絵三巻箱一二入」

と記載がある。今日、この「シャレ絵」が今日の『鳥獣人物戯画』と言われている。高山寺は『巖助住年記』によれば天文16年(1547)戦乱により炎上したことが伝えられており、この時の戦火で『鳥獣人物戯画』もなんらかの被害をこうむったことが考えられ、復元のさいに従来とは異なる絵巻ができたと考えられている。このため、本来の『鳥獣人物戯画』がどのようなものであったのかについて再現研究が今日行なわれている。上野憲治氏の仮説によれば、甲巻は2巻にわかれ、乙巻は1巻本としている。また各巻の展開場面は、甲巻の1巻目は、祭りの行列、相撲、双六、囲碁、腕相撲、首引き、走り高跳び、法絵、印字打ち、田楽、甲巻の2巻目は、競馬、蹴鞠、舟遊管弦、水遊び、的弓、乙巻は、馬、牛、鷹、犬、鶏、鶯、玄武、麒麟、豹、山羊、虎、獅子、竜、象、獺という順序になるという。『病草紙』と比較対照した場合、重要なのは、甲巻で、この一連の展開は、当時の京の貴族、あるいは庶民の生活様式を、鳥獣に仮託して描かれていると考えられる。『鳥獣人物戯画』の中で、兎と蛙の相撲、田楽見物の猿と蛙の喧嘩などそのまわりをとりかこむ鳥獣のしぐさが、『病草紙』の肥満の女、白子の女などと相似点が存在する。このことは、ひとつの描写様式が存在していたことが推測される。『今昔物語』、『古今著聞集』によれば、嗚呼絵の存在、さらに当時絵画論が盛んであったことが明らかであり、描写に対してもそれなりの一定の概念があったと考えられる。『鳥獣人物戯画』の乙巻の角突き合わせる二頭の牛の図は、『年中行事絵巻』にもみられ、その『年中行事絵巻』の中に、加茂祭の行列の中にみられる風流笠の上に鳥獣の描写がみられる。今日、『年中行事絵巻』が後白河法皇によって作られていることがはっきりしているので、『鳥獣人物戯画』もやはり後白河法皇と何らかの関係があ

り、蓮華王院の宝蔵庫に収蔵されていたと推測される。

『病草紙』も、病という日常おこる現象を主題と

しており、また『鳥獣人物戯画』も日常生活を鳥獣に置き換え描写したならばそこに共通性を見出すことができる。